

早稲田大学図書館所蔵の古筆切資料

兼 築 信 行

一 はじめに

近年、古筆切研究の進展はめざましい。日本古典文学研究の領域においては、本文研究に資するものとして重視され、資料紹介や集成、そして内容研究が盛んに行なわれている。古典籍の断片、古写本の一部分という意味で書誌学的価値も大きい。しかしながら古筆切は、一方で美術骨董品として取り扱われる場合がある。手鑑や掛幅といった形態で保存されていたり、屏風等に貼り交ぜられていたりする場合は、一般に極めて高価である。また古書肆等において単葉で販売される場合も、資料価値の高い切は研究者間の購入競争が激烈で、大学図書館が蒐集するには必ずしも適さない側面がある。鶴見大学附属図書館のように古筆切の収蔵に熱心な図書館もあるが、目利きの専門研究者を専任教員として擁していればこそであろう。そのような意味で、本学図書館の所蔵する古筆切資料は、極めて乏しいのが現実である。

そうではあるが、本学図書館に古筆切が皆無であるわけではない。次節で述べるように、古筆手鑑を一帖所蔵し、ここ十年ほどの間に一括また単発で購入したものがいくつかある。名葉といわれる切はほとんど無いのだが、研究者

の関心が書写年代の下がる切にも及んできた昨今の状況のもとでは、これらの資料を整理し公開する意義が生まれてきた。

稿者は現在、本学図書館所蔵の古筆切資料を画像データベースとして公開・提供すべく計画を進めている。本稿では言わばその「予告編」として、所蔵資料の概要と、特に注目すべき若干の切を紹介しておくこととしたい。

二 所蔵古筆切関係資料の概要

まず古筆手鑑が一帖ある。請求番号チ六 三八六八。縦三九・〇糎、横二五・〇糎。表一九折(三八面)の手鑑帖本で、蔵書カードには、昭和二四年八月二三日付で「洞富雄購入」、価格は四九五〇〇〇円であった旨が記載されている。表六八葉、裏七一葉の計一三九葉を貼付するが、うち六六点は短冊、一三点は色紙であり、内容的には水準の高い手鑑とはいえない。故橋本不美男元文学部教授が大学院文学研究科の文献研究の授業で教材として取り上げられたことがあった。

「古筆切一括」は現在未整理の状態にあり、整理番号も付されていないが、井上宗雄元文学部教授が大学院文学研究科の演習で教材とされ、大学院生により調査されたことがある。全五四葉のうち三〇葉は色紙で、内容は玉石混交といったところである。この古筆切一括に含まれる資料のうち、隆達節の断簡一葉は、小野恭靖『隆達節歌謡』の基礎的研究』(一九九七年二月 笠間書院)に紹介されている。

掛幅としては、柘枝切万葉集断簡(後掲)、頓阿法師自詠切(へ四 八〇八七)がある。後者は小林大輔「新出の頓阿日次家集(断簡)をめぐって」、『国文学研究』二一九 一九九九年一〇月)に資料紹介される(同論文発表の時点では整理中であったが、請求番号が付された)。また未装の伝一条兼良筆源氏物語断簡一葉がある(後掲)。

特殊な資料では、伝三条西実枝筆源氏物語五四帖写本(へ二 四八六七 五一)の表紙裏に用いられる反故の中に、多くの古典作品が認められ、新美哲彦によって調査されている(本紀要前号参照)。

古筆切の現品としては以上のようなどころであるが、関係資料として写本『古筆名物切鑑證』(チ六 八五二)がある。縦二六・七糎、横一八・八糎の袋綴本一冊。淡茶地に茶の縦刷毛目模様の表紙、同左上に「古筆名物切鑑證」と直書きする。墨付三三丁。聖武天皇以下の名物切を掲げ特徴を注したもの。記載内容は文政一一年版『古筆名葉集』にほぼ一致する。跋文(三三丁裏)は次の通りだが、これも『古筆名葉集』凡例の第二条にほかならない。

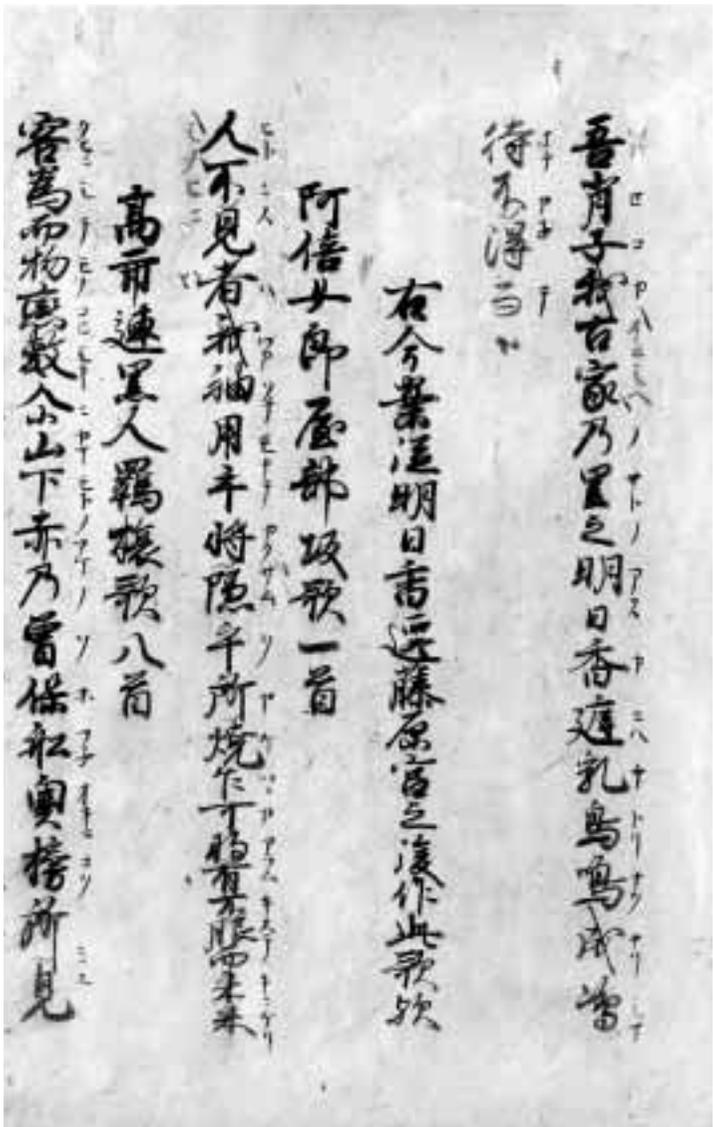
名物切の内四半六半大中小是は杉原にても半紙にてもたとへは四半なれは四おりに切その一枚を云六半なれは六きりその一枚をいふ八半なれは八きりの其一なり
香色と云は紙に虫のいらぬやうにきはだにてそめたるを云也

三 柘枝切万葉集断簡

本学図書館においては、上代文学に関する古写本の類は皆無であり、例えば体系的な日本古典文学史に関する展示を行う場合、まことに遺憾な状態が続いてきた。それを補う資料として、近時、校友の勝又祐司氏より寄贈されたのが標記の掛幅である。

本品は一九九八年一月の東京古典会古典籍下見展観大入札会に出品されたもので、同会目録に二番として写真が掲載されている。

柘枝切は、佐佐木信綱編『万葉手鑑』(一九四七年 京都印書館)に掲載された断簡で、『校本萬葉集』一七「萬葉集諸本輯影新增補」では「第五十九」として載っている。巻三・三八五番歌左注と三八六番歌(和歌のみ)の三分行が知



られていた。お茶の水図書館蔵。命名は三八六番歌の第二句「柘之左枝乃」に拠るが、原態は卷子本と推定されている。『古筆学大成』第二卷（一九九〇年六月 講談社）には「筆者未詳万葉集切」 図版番号二四八として掲載されている。佐佐木信綱は「鎌倉時代末期、乃至吉野時代」、小松茂美は「鎌倉中期」の書写本とする。

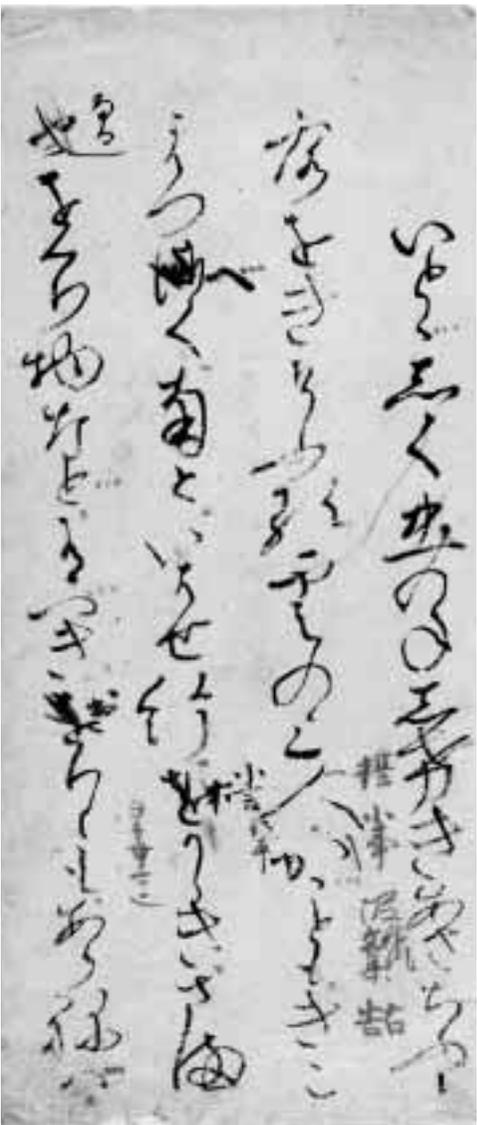
本学図書館の所蔵に帰した新出断簡は、巻三・二六八番歌から二七〇番歌にいたる七行分。寸法は縦三一・三糎、横二〇・〇糎。本文字高は二五・六糎。料紙は斐楮交漉紙。二六八番歌第三句の右傍訓「イニシへ」、二六九番歌初句の左傍訓「シノヒニハ」は朱書。また、二六八番歌「不得」、二六九番歌「不見」「将隠」「所焼」「将有」「不服」、二七〇番歌「所見」の字間には朱筆の雁金点が付されている。新出断簡の右余白には上下に綴穴二つずつが認められる。すなわち本断簡の原態は卷子本ではなく冊子本であったことが判明する。

四 源氏物語の断簡

「古筆切一括」（未整理）の中に、今川了俊筆伊予切源氏物語断簡が一葉ある。縦二六・七糎、横一一・一糎の楮紙、字高は二三・五糎、料紙は楮紙。極札は切裏に貼り付けられているが、表「今川殿貞世 法名了俊ノいとゞしく琴山（本家印）」、裏「切 甲戌四 了珉」の古筆了珉極である。切裏書は右上に「今川了俊」、左上に「甲戌四」、左下に「了珉札正筆」と記す。伊予切は専修大学図書館に空蝉一卷が所蔵されるほか、夕顔巻が諸家に分蔵されている。本学図書館蔵の断簡は桐壺巻であり、桐壺更衣の母君の詠歌「いとどしく虫のねしげきあさぢふの」およびそれに続く部分にあたる。わずか四行分にすぎないが、極めて注目される一葉である。なお本断簡は今川了俊八五歳時の筆である。

源氏物語の切では、最近時に収蔵された伝一条兼良筆源氏物語断簡一葉（未装）も合わせて紹介しておきたい。『思

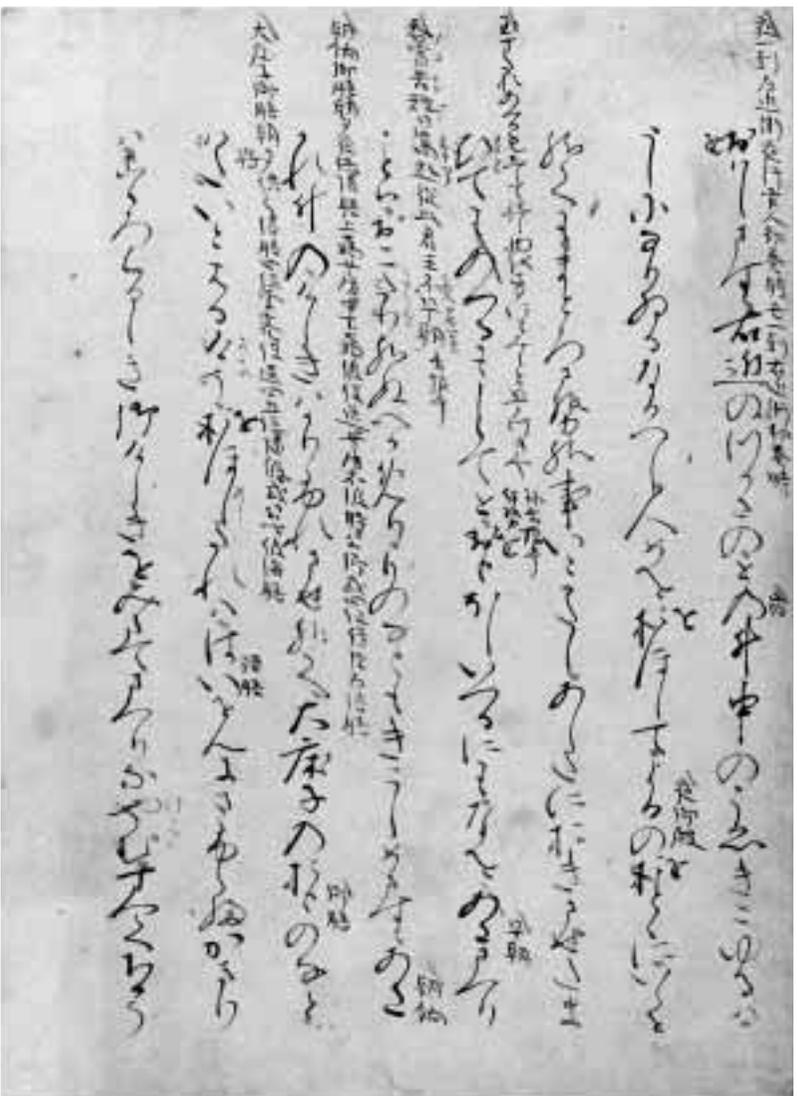
【伊予切】

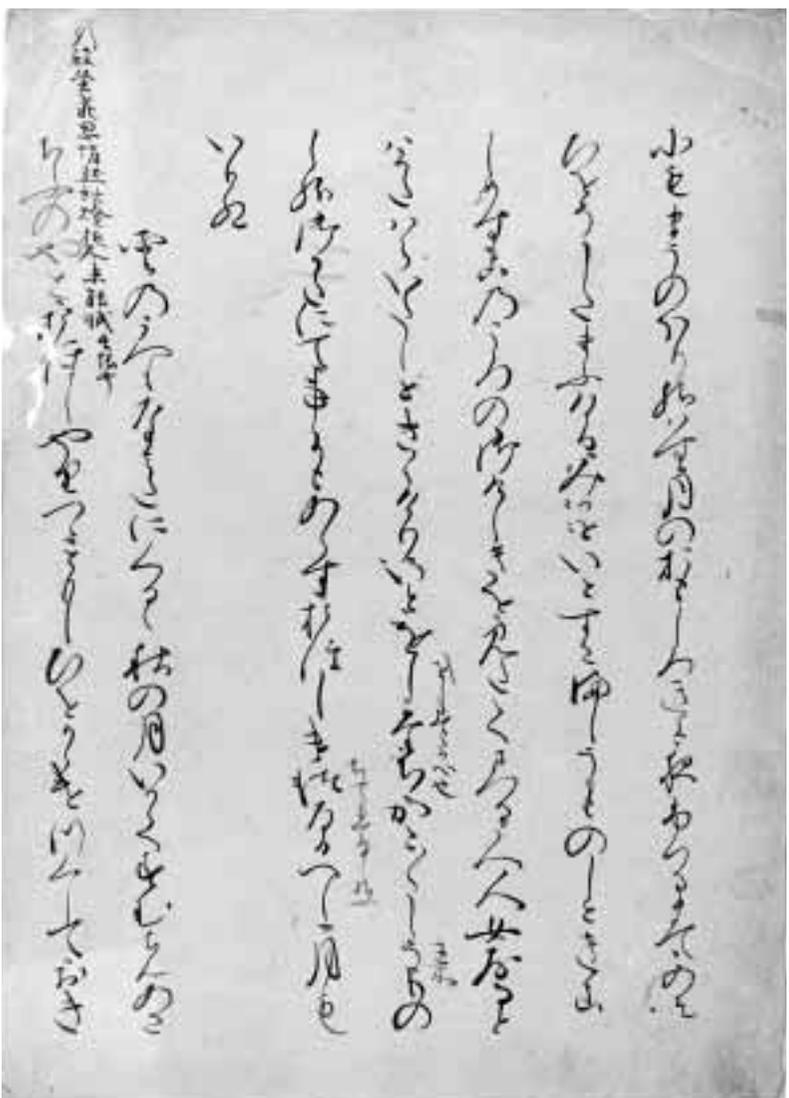


文閣墨蹟資料目録』別冊二一号(二〇〇年三月)の一七五所掲のもので、目録には「加賀前田家旧蔵」と記載されていた。ただし現品自体には前田家旧蔵を徴証する要素は見当たらない。現在整理中のため請求番号は付されていない。縦二六・〇糎、横一九・〇糎、本文字高三・三〇糎、料紙は斐楮交漉紙、一面八行分である。極札は「一條殿兼良公琴山(本家印)」「(裏面剥離)」とあり、切裏左上に貼付されている。切裏には右上に「子四十一兼良ノ二十八枚ノ内」(朱筆)、右下に「六十二番ノ兼良公ノ二十九枚ノ内」(墨書)の小紙片を貼付する。

桐壺巻の断簡である。朱墨による種々の書き入れがあるが、河内本系の本文を青表紙本系の本文校合し朱訂してい

【伝兼良筆源氏切】





る点が注目されるだろう。なお、本断簡の直前の一面が石川県立美術館蔵手鑑に収められている(三六)。「古筆学大成」第二三卷(一九九二年六月)および「古筆手鑑大成」第一三卷(一九九三年九月 角川書店)参照。また同手鑑は金沢の豪商山川家収集コレクションの一つで、それ以前の伝来は一切不明とのことであるが、本学所蔵断簡が「加賀前田家旧蔵」と伝承されることと、その直前のツレが金沢に所在することとの間には、何かしらの連関が存在するのかもしれない。「古筆学大成」の解説によれば、個人蔵手鑑に奥書部分の断簡が存し、その花押を検証するに一条兼良の真筆と認められるものという。

偶々稿者は石川県立美術館蔵手鑑所収断簡の極めて忠実な模写を所蔵している。料紙は間似合紙。参考までに架蔵模写切の写真も掲げておく。

源氏物語ではこれらのほか、古筆手鑑中に伝慈鎮和尚筆の六半切(宿木巻、両面書写)があるが、今は割愛に従う。

五 歌切

歌切に關してもいくつかの注目すべき資料が見出されるが、ここでは一葉のみ、伝浄弁筆松花集切を紹介しておく。残欠私撰集である松花和歌集には、伝浄弁筆切のほか、伝兼空筆下田屋切、伝正広筆四半切などの古筆切が伝存している。本学図書館蔵の伝浄弁筆切は、「古筆切一括」(未整理)の中に含まれているもので、寸法は縦二五・七糎、横一九・二糎、字高二・八糎、料紙は斐紙。極札は切裏に貼付されており、「藤本浄弁法師 冬の哥 牛庵瓢形朱印」という畠山牛庵極(裏面剥離)である。切裏書は、右上に「藤本浄弁 浄知」と墨書する。巻第四・冬歌の一〇六番歌詞書から一〇八番歌(歌番号は新編国歌大観による)にあたる。

で待っていて、いつまでも埒はあかないので、幸か不幸か本学図書館に所蔵される古筆切が乏しいことに任せて、これを使ったモデルを構築することを決意し、作業に着手した次第である。二〇〇一年度中の公開を目指す、大方のご意見を頂戴できるならば幸いである。

(かねちくのぶゆき 文学部助教授)